

清水泰先生の近著

「日本文学論考」について

鈴木 弘 道

この六月初め、「日本文学論考」と題する清水泰先生の論文集が初音書房から刊行された。立命館大学入学以来、長年御指導を賜はつて来た教へ子の一人として、まことに慶賀に堪へない次第である。

ところで、先日の本誌編輯会議で、私が本書につき「書評」を書くことに決定したらしく、突然その連絡を受けて、正直なところ全く弱つてしまつた。私は今までに、自説を展開する手続上、それに関係ある他の学説を検討・批判したことはあつても、自分の専攻とする部門外の学説や研究の批判は曾て試みたことがない。正鵠を得ない無責任な批判は、その業績を冒瀆することになるとともに、論者に対しても非礼この上もないし、また一方、いたづらに自らの無力を天下に表明するだけであつて、臆病な私のよくすべからざるところである。時として「書評」の「評」なる反

駁の出現することがあるのもまた当然のことであらう。したがつて、「書評」や「論文評」を試みるものは、少くともその論者と同等もしくはそれ以上の実力を持つ研究者であることを必要とするが、清水先生の今回の論文集に対しては、どう考へて見ても、門外漢であり不勉強な私など評者として不適任はまりないし、第一褒貶いづれにせよ、いやしくも恩師たる方の御高著を、教へ子の分際で一般書評のごとくとやかくあげつらふこと自体、私にとつては大きな苦痛であり、たうてい私の良心が許さない。以上のやうな考へを抱いてゐる私は、すぐにこの依頼をお断りしようと思つたが、断れば編輯計画に支障を来す結果にもなりかねないので、進退ここに窮まつたあげく、とりあへず「書評」ならざる「紹介文」を記すことにした。著者即ち恩師なるが故にいたづらに君子然として黙すよ

りも、むしろ積極的に、駄文ながらも「紹介文」を以て恩師の偉業を会員各位とともに讃へることこそ、教へ子たるもののなすべき義務ではないかと考へたからである。

さて、本書は、全巻の約三分の二を占める主論文の「継子物語の研究」と、「奈良絵本考」「土佐日記の女性仮託説を排す」「平貞文(平仲)伝の一考察」「堤中納言物語における笑い」の四論文とより成つてゐるが、これらの極めて多彩な論考は、「後記」によれば、いづれも先生が多年にわたり続けておいでになつた御研究のうち、昭和二十四年から同三十四年までの約十年の間に書かれたもので、先生の御講筵に列したもので、題名を拝読しただけですぐに先生のお姿や学生時代の自分が思ひ浮かべられるくらゐに、懐かしいものばかりである。殊に「継子物語の研究」は、周知のごとく先生の独壇場で、私が学生として先生の御講義を拝聴してゐた頃の「国文学特殊講義」のノートを開いて見ても、既に落窪物語・住吉物語・岩屋の草子など継子物語に関する内容で埋められてゐる。もちろん、私のこの古いノートに記された講義内容は、先生の御研究のごく一端であつて、特別

に系統だてられたものではないが、本書の「継子物語の研究」は、継子物語の発生と、平安時代から室町時代にかけて現れた多数の継子物語について詳述してあり、継子物語の史的研究ともいふべき形態になつてゐるから、日本文学に於ける継子物語の流れを一望のもとに見下すことができてまことにありがたい。

本論文の目次の大略を挙げると、第一篇の「平安時代の継子物語に就いて」は「平安時代物語に見える継子物要素」「落窪物語」の各章に、第二篇の「鎌倉時代の継子物語に就いて」は「住吉物語」「小夜衣」の各章に、第三篇の「室町時代の継子物語に就いて」は「鉢かづき」「嵯皮」「花よの姫」「伏屋物語と美人くらべ」「岩屋の草子」「秋月物語」「一本菊」「室町時代継子物語の結語」の各章に、それぞれ細分されてゐるが、これらの一章や一節の成り立ちは決して表面的な解説に終らず、常に多くの資料を駆使して逐次その章・節に関係ある事項に及ぼすといふやうに、御造詣の深さを遺憾なく發揮してをられる。たとへば、第一篇第二章「落窪物語」の「落窪物語と散佚物語」では、落窪物

語中に見える「交野の少將」と「物いみの姫君」の二つを散佚物語とお考へになつて考究されてゐたり、第二篇第二章「小夜衣」の「小夜衣の梗概と構想」では、単に小夜衣に關してのみ述べられてゐるのではなく、竹取・伊勢・落窪・宇津保・源氏・狭衣・苔の衣・海人の刈藻・恋路ゆかしき大将・いはでしのぶ・我が身にたどる姫君・和泉式部日記など、幾多の他作品にも言及されてゐるのである。この点、六代勝事記や滝口入道（樗牛作）の講読で、博引旁證、極めて精緻な御講義を續けて下さつた後藤丹治先生の御研究の態度とは全く共通するが、ここに私は、皮相的な見解に陥らずして物の裏面までよく見とほす深い洞察力こそ、眞の学問研究には絶対に欠くべからざることを、あらためて痛感させられたことである。

次に、本論文の各作品には梗概・構想・書名・諸本・成立などの節が設けられてゐるから、その題名だけを見ると、あるひは戦前の岩波講座日本文学の「日本文学書目解説」や石山徹郎氏著「日本文学書誌」などの解題書の類を想起しないでもないが、前にも述べた通り、本書はあくまでも論文集であつて、本

論文も単なる表面的な解説文ではなく、各作品はすべて継子物語といふ一貫した主題によつて統一され、互に有機的な連繋が保たれてゐる。したがつて、論文としては一見不要と考へられがちな梗概なども、本論文に於ては通読する上に極めて重要な意義を持つてゐるわけである。とかく論文といふものはいへん固くて、専攻を同じくする研究者以外のものには、論旨の把握に苦痛を感ずることさへ往々にしてあるものだが、本書所収の各論文はいづれも氣品の高い流暢明快な筆で一氣に述べられてゐるほか、註なども簡単に前後の頁を対照する煩雜さもなく、殊に梗概の附載されてゐる本論文などは、初学者でも容易に理解されることと思はれる。まことに、三十四年間もの長い間、本学に於て多くの青年学徒を導いて來られた先生の教育者としての烈しい情熱が、自らかうした形で現れたものであらう。ともすれば、細心・緻密の名に隠れて片言隻語を批判したり、不必要なことで註してみたり、日本語になつてゐない難解な悪文を書いたりするやうな私など、先生の鷹揚な御執筆ぶりにもつと学ぶところがなければならぬと、ひたすら慙愧に堪へない。

主論文を除く他の四論文のうち、最初の「奈良繪読本考」は最も手堅い御研究ではなからうか。これは本年始めに Mr. Richard Zwimble の英訳で Los Angeles の Dowson's Book Shop から出版されたもので、いつか先生にその実物を拝見させていただいたことがあるが、奈良絵本に関する知識など全然持たない私も、その美麗さには思はず驚歎の目をみはつたことであつた。種々様々な写本類を藏され、夙に奈良絵本とも密接なつながりを持つてをられた先生の「奈良繪本考」が、他に比類を見ないほどの成果であることは今更ここに喋々するまでもなからう。奈良絵本の文献学的外形等の考察から始めて、奈良絵本の名義・内容・起原・画風・文学的意義などに説き及ぼされたこの堂々たる論文は、国文学研究者のみならず美術に関心を寄せるものもぜひ一読すべきであると信ずる。

「土佐日記の女性仮託説を排す」平貞文（平仲）伝の一考察は、ともに先生が曾ての「立命館文学」に発表されたものであつて、当時、国文学の研究方法についても暗中摸索の態であつた私は、これらから大きな刺激と示

唆を受けたものである。近頃、「論文の書き方」などと銘うつた、初学者向きの案内書をよく見かけるが、それを参考にするばかりでなく、実際の論文を読んで、その中から論文の形態とか論の進め方とか資料の用ひ方などを検討して見ることも頗る必要であつて、これらの論文はその場合のテキスト用としても恰好なものであることを、実際の体験者として述べておきたい。

「堤中納言物語における笑い」は、本書中、最も新しく書かれたもののやうである。既に、堤中納言物語に関する学界最高の權威者との名声高き先生のこの論文は、本文批判・書誌学的研究・註釈等々あらゆる面の基礎的研究をも一応完了された、その揺ぎなき礎石の上に立つ純粹の文学研究の殿堂である点、まことに興味津々たるものがある。文学を文学として真に鑑賞し得る境地に到達することは決してなまやさしいことではない。後学の私達

は、先生がわざわざこの一篇を以て掉尾を飾られたことを静かに考へ、そこからもう一度私達自身の文学研究態度を見直すべきではあるまいか。

いはる。索引の作成は実にめんどうなものであるが、先生は、原稿の整理や校正はもちろん、この索引の作成までもすべて他人を頼られずに極めてスピーデイにお仕事を続けられたさうである。この鑿鑿たる先生のお姿はまことに頼もしい限りであり、末永く御指導をいただける私達の喜びもまたひとしほである。本書は前述のごとく、専門家だけの読むべき研究書ではなく、研究部門を異にするものにも参考になる事項を多く含んでゐるから、大学のみならず高校の図書館にもぜひ一本を備ふべきであらう。殊に、先生のありがたい御薫陶を受けた私達教へ子は、この際、本書をそれぞれの書架に飾つて、先生のこの輝かしい業績を心から祝福しようではないか。

「紹介文」のつもりでゐながら、をこがし

くも書評めいたことが飛び出してしまつたりして、かへつて先生には非礼にわたることがあつたかも知れない。ここに謹んでお詫び申し上げるとともに、今後の御精進を切にお祈りする次第である。

A5判二五九頁初音書房（京都市東山区三条通白川橋東五丁目）昭和三十五年六月刊
五〇〇部限定 定価六〇〇円